第二編　西南役

第一章　起因及出動

西郷隆盛曾々征韓論に於て岩倉公一派と議合はず官を辭して故山に歸り私學校を建てて專ら子弟の教育に從ふ、明治七年江藤新平亂を佐賀に起すを初めとし萩の亂、熊本の亂、秋月の亂等相續て起つた。明治十年二月薩摩の私學校の生徒等も政府當局者の施政に慊らず終に君側を清するを名とし西郷隆盛を擁して起つや熊本、佐土原、大分等の志士多く之に應じ西南の天地物情騷然たるに至つた。二月十二日隆盛一萬五千の壯兵を率ゐて鹿兒島を發し同月十四日熊本鎮臺を包圍するに及び

天皇直ちに隆盛以下の官位を奪ひ有栖川熾仁親王を征討總督に任じ各鎮臺兵に出兵を命せらる、即ち我聯隊本部及第二大隊は二月二十二日屯營出發、神戸に至り同時に待命すること月餘、三月二十五日征討軍に編入せられ二十六日神戸を發して海路博多に上陸し

0967

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第一大隊は三月二日屯營出發、神戸に至り其の第一、第二中隊は別働第二旅團に編入されて三月十三日神戸を發して同じく二十一日奈久に上陸し第三、第四中隊は二十三日神戸出帆長崎に至り別働第三旅團に編入せられ轉じて八代に向ひ第三大隊は高知縣の警備として土佐に派遣された。

第二章　戰鬪の經過

第二大隊は聯隊長自ら之を率ひて三月二十四日午後四時福岡縣博多港に上陸した、會會縣下士族の徒、賊軍に響應して各所に火を放ち頻りに騷擾しつゝあつたので聯隊長は部下を戒心しつゝ遂次上陸を終り本部を蓮地妙典寺に置き各中隊を集結し夜を徹して附近の敵狀を偵察した。同夜半第二中隊長金子大尉其の右小隊を率ひて偵察のため野芥村方面に前進したるに翌日午前三時若干の賊兵に遭遇し之と戰鬪を交へ午前七時に至つて遂に之を擊退した。

0968

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

二十九日四方の賊を掃蕩せんがため原大尉は第三中隊及第四中隊右小隊を率ひて椎原方面に河野少尉は第四中隊殘部を率ひて金武村方面に前進し三十日更に田中大尉は第二中隊左小隊を率ひて野芥村方面に前進し又第二中隊の四半小隊は河野隊に增援した。諸隊は所在の賊徒を驅逐しつゝ前進し四月三十一日午前野芥村附近に於て相會す、恰も同地には曩に金武村附近の賊と戰つて敗れたる後備歩兵一中隊と巡査隊あり、之と協力して金武山の賊壘を攻擊す。乃ち第一中隊を主力とせる一隊は前進して午後三時石金村に至り賊の一團險要に據守して我を拒止するに會ひ兵を三分して本道及び其両側の急峻なる高地より敵の要害に迫り殊死奮鬪三時間、午後六時になつて纔かに之を擊攘した、我兵の死傷するもの七、次いて第二小隊及び第四中隊の一部と後備中隊及び巡査隊は共に金武山に向ひ午後零時に頂に據れる優勢なる賊兵に對して攻擊し克く協同して三面齊しく突擊を實施して終に賊徒を擊攘し其の陣地を占領す。此の日猛雨盆を傾くるが如く至り我が兵卒の携帶彈藥悉く濕潤して用をなさず專ら銃槍を以て接戰し河野少尉以下十名負傷す、是れ本役中同大隊の最も苦戰したる戰鬪なり。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第一大隊は夫々別働旅団に編入後田原、植木、山鹿に賊と激戰を交ふ。四月十六日に至り薩軍熊本城の重囲を解いて退き六日人吉、佐土原を奪はれ八日延岡を拔かれ長尾山の一隅に壓迫されたが敵は茲に最後の勇を鼓して隆盛自ら手兵數百を率ひ八月十四日夜半猛然として我が可愛嶽の哨線を突破して脫出したが大勢既に決り遂に鹿兒島に至り城山に據る、即ち官軍之を二重三重に包圍し各旅團熊本鎭臺兵協力して攻擊し（我が聯隊の選拔兵を含む）第四旅團の攻擊隊は銃槍突擊を以て敵壘に突入し其處に群がる敵を掃殺す、壘中に村田、桐野、邊見、池上等の死屍あり又壘を距つること十余歩にして隆盛の死屍を發見し次で其の首級を我が軍の手により發見さる。

斯くて首魁隆盛以下悉く城山の朝露と消えて西南の賊徒此處に平定せるを以て同二十七日旅團の編成を解いて凱旋を命ぜらる、乃ち鹿兒島より乘船して第一大隊は十月一日、第二大隊は同三日神戸に上陸し同月二十二、三日に亘り赫々たる武勳を輝かせつゝ衛戍地に凱旋した。（第三大隊の行動に就いては何等知る所なし）

0970

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp